

## 4月7日のメッセージ

聖書：ヨハネによる福音書 20：19－31

### 「わたしの主、わたしの神よ」

「アナタハ神ヲ信ジマスカア？」

子どもの頃、テレビに映された、ステレオタイプにデフォルメされたキリスト教宣教師の姿を見て、「何をどう信じたら良いのか」と思ったことがあります。目にも見えない神の存在をどう証明するのか、と。しかし、それから数十年、私は神を信じ、神を伝える者となりました。では、何を見て、何を知って、神を信じたのでしょうか。何も見ていません。証拠の一つも提示されていません。しかし、信じています(「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。」ペトロの手紙一1:8)。

イエスの十字架以前、トマスは確かにイエスを信じていました。奇跡に感動して、自分がその一助となっていることを素直に喜んでいました。ところが、イエスが復活された時、その場になかったことで、彼の信仰は揺らぎます(「トマスは言った。『あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。』」ヨハネによる福音書20:25)。

いや、もしかすると、元々何を信じていたのかという信仰の岐路に立たされたのかもしれない。「自分が見たいように見、見えるものを信じていた」のではないかと。それは、復活の朝、マグダラのマリアがイエスの遺体を捜した姿に通じるものがあるでしょう(「マリアは、……言った。『あなたがあの方を運び去ったのであれば、どこに置いたのか教えてください。……』」ヨハネによる福音書20:15)。

しかし、そもそも聖書の民は何を信じて生きてきたのでしょうか。もちろん、奇跡はわかりやすく救いにつながるので、それを信じた者も多かったことでしょう。例えば、モーセと共に海を渡ったイスラエルの民の中には、そういう者たちもいたろうと推察されます(「主はわたしの力、わたしの歌/主はわたしの救いとなってくださった。この方こそわたしの神。わたしは彼をたたえる。わたしの父の神、わたしは彼をあがめる。」出エジプト記15:2)。ただ、決してそれだけではなかったはずだ、とも思うのです。モーセの言葉を信じて従った者、つまり神の言葉を信じて従った者たちも多くいたはずなのです。天地万物の始まりから、一度も神の姿を目の当たりにしたことがない者であっても、神を信じて生きてきました。神の約束を、神の言葉を信じて生きてきたのがイスラエルの歴史でした。

「トマスは答えて、『わたしの主、わたしの神よ』と言った。」(ヨハネによる福音書20:28)

復活の朱を目の当たりにして、トマスは信仰を告白します。イエスも指摘されるように、確かにこの言葉は「見たから」出てきたのでしょう(「イエスはトマスに言われた。『わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。』」ヨハネによる福音書20:29)。

しかし同時に、トマスは自らが棄てようとしていた、イスラエルの民が連綿と受け継いできた「見ないのに信じる」信仰にこそ、神中心の信仰にこそ、信仰の神髄があることに気づかされたのではないのでしょうか(「家を建てる者の退けた石が/隅の親石となった。」詩編18:23)。そして、それを棄てようとする不信仰な自分の前にもイエスが現れてくださったことを通して、「自分が見たいようにしか見ない」信仰を恥じたのではないのでしょうか。ですから、この言葉はトマスの真の信仰告白だとも言えるのです。

私たちも「自分の見たいようにしか」世界を見ようとしません。幼き日の私のように、自分の目に見えるものが世界の全てだと思い込んでいる時があります。信じたいものだけを信じようとする不信仰が今もまたあるのです。そして、そのように不信仰な私たちの間に今日、またイエスは立ってくださっています。目には見えないけれど、確かにイエスは今、ここにおられるのです(「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」マタイによる福音書18:20)。

「わたしの主、わたしの神よ。」

トマスと共に、私たちもまた、新たに信仰を告白しようではありませんか。自分を棄てて、神と共に歩んで参りましょう。そこからしか全ては始まらないのですから。そこからしか希望は生まれてこないのですから。

